

夢

寺田寅彦

青空文庫

石の階段を上って行くと広い露台のようなどころへ出た。白い大理石の欄干らんかんの四隅には大きな花鉢ヴァエースが乗っかって、それに菓物くだものやら花がいっぱい盛り上げてあった。

前面には湖水が遠く末広がりに開いて、かすかに夜霧の奥につづいていた。両側の岸には真黒な森が高く低く連なって、その上に橋をかけたように紫紺色の夜空がかかっていた。おびただしい星が白熱した花火のように輝いていた。

やがて森の上から月が上って来た。それがちょうど石鹼球シャボンだまのような虹の色をして、そして驚くような速さで上って行くのであった。

すぐ眼の下の汀みぎわに葉蘭はらんのような形をした草が一面に生えているが、その葉の色が血のように紅くて、蒼白い月光を受けながら、あたかも自分で発光するもののように透明に紅く光っているのであった。

欄干の隅の花鉢に近づいてその中から一輪の薔薇ばらを取り上げてみると、それはみんな硝子ガラスで出来ている造花であった。

湖水の面一面に細かくふるえきらめく漣を見詰めているうちに私は驚くべき事實に気が付いた。

湖水の水と思つたのはみんな水銀であつた。

私は非常に淋ししような心持になつて来た。そして再び汀の血紅色の草に眼を移すと、その葉が風もないのに動いている。次第に強く揺れ動いては延び上がると思う間にいつかそれが本当の火焰に變つていた。

空が急に真赤になつたと思うと、私は大きな熔鉢炉の真唯中に突立っていた。

二

私は棧橋の上に立つていた。向側には途方もない大きな汽船の剥げ汚れた船腹が横づけになつている。傘のように開いた荷揚器械が間断なく働いて大きな函のようなものを吊り揚げ吊り降ろしている。

ドイツの兵隊が大勢急がしそこにそこらをあちこちしている。

不意に不思議な怪物が私の眼の前に現われて来た。それはちょうど鶴のような恰好をし

た自働器械である。その嘴が長いやつと鋏のようになって、その槓杆の支点に当るねじ鉦がちょうど眼玉のようになってゐる。鳥の身体や脚はただ鎚でたたいて鍛え上げたばかりの鉄片を組合せて作ったきわめて簡単なもののように見える。鉄はどこどころ赤く錆びている。それにもかかわらずこの粗末な器械は不思議な精巧な仕掛けでもあるかのようになく自働的に活動している。ちょうど鶴のような足取りで二歩三歩あるくと、立ち止まつて首を下げて嘴で棧橋の床板をゴトンゴトンと音を立ててつつついている。そういう挙動を繰返しながら一直線に進んで行くのである。

私はその器械の仕掛けを不思議に思うよりも、器械の目的が何だろうと思ひ怪しんでみたが全く見当も付かなかつた。

棧橋を往来している兵隊等はこの不思議な鉄の鳥に気が付かないのか、気が付いていても珍しくないのか、誰一人見向いてみるものもない。

それで鉄の鶴は無人の境を行くようにどこまでも単調な挙動を繰返しながら一直線に進んで行くのである。

そのうちに向うから大きな荷物自動車が来た。何かしら棍棒のようなものを数十ずつ一束にしたものを満載している。

近づいてみると、その棒のようなものはみんな人間の右の腕であった。

私は何故かそれを見るとすべての事が解ったような気がした。

鉄の鶴が向うの方で立ち止まって長い鉄の頸くびをねじ向けてじいっと私の顔を見つめていた。

三

高架鉄道から下りてトレプトウの天文台へ行く真直な道路の傍に自分が立っている。道の両側には美しい芝生と森がある。

銅色をした太陽が今ちようど子午線を横切っているのだが、地平線からの高度が心細いように低い。

私はその時何という理由なしに「もういよいよ世の終りが近づいたのだ」と思う。

向うの方から大勢の群集が不規則な縦隊を作つて進んで来る。だんだん近づくのを見ると、行列の真先には牛や馬や驢馬ろばや豚や鶏が来る。その後から人間の群がついて来る。四角な板に大きな文字で何かしら書いたのを旗のように押し立てている人もある。大きなボ

ール紙のメガフォーンを脇の下にぶら下げているものもある。

豚や鶏は時々隊をはなれて道^{みちばた}傍の芝生へそれようとすのを、小さな針金のような鞭でコツコツとつつついては列に追い返している男がいる。

避雷針のようなものの付いた兜^{かぶとがた}形の帽子を着た巡査が、隊の両側を護衛している。

巡査がどれもこれも福々しい人の好きそうな顔をしているのに反して、行列に加わっている人達の顔はみんなたつた今人殺しでもして来たように凄^げい恐ろしい形^{ぎようそう}相^{さう}をしている。家畜の顔を見ていると、それがだんだんにいつかどこかで見^みた事のある人間の顔に似て来るような気がする。そしてそれがみんないかにも迷惑^{めいわく}そうな倦怠^{けんたい}しきった表情^{へいしやう}をしているのである。

広場のところまで来ると行列が止まった。そして家畜を中心にして行列の人と見物人とが円陣を作った。

行列の一人が中央に進み出て演説を始めた。私は一所懸命にその演説者の言葉の意味を拾おうと思つて努力したが、悲しい事には少しも何の事だか分らなかつた。ただ時々イエネラール何とかという言葉を繰返すのがやつと聞きとれただけであつた。

演説者は脊の低い男で、顔が写真で見たトロツキーによく似ていた。右の手を空気を切

るように縦横に打ち振つては信じられないほど大きな声でどなっていた。時々左の手を家畜の方に差し延べては一種特別な訴えるような表情をして見せた。

演説が終つたと見えて、ワーツと云う声が出た。そして再び隊を作つた行列は真直ぐな大道をあちらの方へだんだんに遠ざかつて行つた。

銅色の太陽がもうよほど低く垂れ下がつて、葉をふるつた白樺の梢にぐるりと廻つて見えるように見えた。その廻転が見ているうちにだんだんに速くなるように思われるのであつた。

「もう少しこれが速くなるとあぶない」そう思つて私は急いでベルリンの町の方へ歸つて行つた。

(大正十一年三月『明星』)

青空文庫情報

底本：「寺田寅彦全集 第一巻」岩波書店

1996（平成8）年12月5日発行

底本の親本：「寺田寅彦全集 第二巻」岩波書店

1985（昭和60）年9月5日第3刷発行

初出：「明星 第一巻第五号」

1922（大正11）年3月1日発行

※初出時の署名は「吉村冬彦」です。

入力：Nana ohbe

校正：松永正敏

2004年3月24日作成

2016年2月25日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られ

ました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

夢

寺田寅彦

2020年 7月17日 初版

奥付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>